俳諧天爾波抄

へ 5
4422
2

へ5
門
4422
巻
2

昭和九年
九月二九日
購求

○五屬下

○詠屬下

かるが

龍にくさ上古は、かもとのみよりあり。中昔よりかかとよ
まれりとそれぐ中昔よりかかと疑の稱。うるい詠の稱とつ
こう上古よりも詠とも疑とも。ひとつにかもとのみよりあり。
もと疑といふもの内だに有るが。詠は勿論うのつるれば上
古よりそれぐひとつにかもといふもさまかりばかりにはふ
とつにかもとのみよりあるが。この中肝要なり。
にもあれ今はぐわがりがりとるるにくらべ相敵しるあるとあしく今まで
の理とあてんとそれぐかるるの稱合。ものしがらかもとるぐくら

ナゲクトハ歎息スルコトナリ　行下の疑屬のかの係下をあらくんぞ一。ふハ世上ニアルかニ同
ジアハセテ心ウベシ　さくこのかるの二例あり。靡の字。花のぶしと。靡の字と
いつて。ゆるぶ。ゆるぶ。ゆるぶ。ゆるぶ。ゆるぶ。ゆるぶ。ゆるぶ。ゆるぶ。ゆるぶ。
同じくゆるぶ。靡トハ。比父ガ裝束ニテノ目安ナリ　花のぶしと。ぶんをねさしらぶ
ぶ。ぶ。ぶ。

[illegible]

詞ズ拙カ[illegible]

[illegible]

相一葉[illegible]

[illegible]

[illegible]

即蕉翁自賛の吐句に「行句こがらしの吹て行方しらぬ冬日
かな」の外につくるまじきものなり。されば蕉翁
ゝゝねざめ。みぞれのなかにぬれてゆく

○第一例　麁の外ハ

猿　神田祭　けいさのおもかげ　敦夫

日　けさのこがらしこうれし稲の秋　土芳

春　花ゝ種まく翁ゆゑ死るなり　誠人

日　蛙の云作茶屋の行くまきうれ　昌圭

炭　月まぶ山ゝ月なを冬外　利牛

荒　茶のむをきりつゝぐこみる外　書晨

日　衣ゝ刀きさらゝくこゝろ寒ふ　蒲漳

日　けさ月の志ぶ頂ゝらいまを外　牡芳

日　いくまきも荷ゝが作ゝ四十貫のまくらゝ　重五

員　やゝくかりくこゝはゝきふ　其角

まゝ荒野。除風が白ゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆ

今は捨てしてもかりつべし。蕉翁はただ落とすとあるといとれ
られ。廉の字を用ひてのことなれば、こゝにあげ、こゝにあるべし
人をすゝめて蕉翁の腸をとどめ、ぞうりぬぎ、落とすの事。
今寺にくこれと称すべし。「八くれ竹の夫ごとのあぶ子ひと夜
ぶつるかのつきれ。六帖貫之」とつるのかど。けは白だりにくさ。うのん
蕉翁もわぶれ。下句。一夜ぶつぶつとしてしらるあしれ
の上句と霞句にしてナ字一字の
かりぶくとうわさの境とぞ。うれにくゆとくべし。そこにて廉の字
すまぶとなると。蕉翁の禁ぶられ。ぶとりの例と付
廉の字かりと言うて用ひ。物用そなべるものし。コハ二出セ心内ニ付合
ノ句アルハ。廉ノ例ナルニヨリテナリ。
コレハ隔戒ノ論ハカヽラヌナリ

○第二例　蕉の字ト云

荒　擅の木れ花と　かるれ　蕉字　芭蕉

春　ものとりて人を休める月夫　日

られるのごとく例と一を付ぶ郎下の例で
くぶぶぶ。その同じ「蕉」月見とつるのとものうるや。
上といつぶぶくぶ。ぶ例ふる廉の字ぶ正例ふる字
ものとぶ。花のうとにくとぶとぶ。ぶ
うぶぶぶ。かの木のひとり花のうるとしとうるとも。
蕉をつるとうるとぶ。ぶとうるとうるとうるとく。世人の栗
をとるとき。俗上とし。ぶ聊とかとうるかるかとし。
引ものくとしれぶとし。擅の木の心はとぶぶくんとれと
いとれし。世人ノ魂ハ。世人ノ井ニヲ　又やとりとうるとう
ソヒリ諫ラレタルナリ
人を月とうるとうるとし。貪まぶと隈かとくとしとれ

くれぬ。さらぬ人を惜むとるぐ。時のもの月ぬ。
こ。晴ともられも。くらぬ。あり天はぐ
くわぐ。目もんく。分まん。こ。きの月こ。
こ人の目ぬ休む。きの雲の仏。せ人の佳ふ。ぬ
めこ。ぬ。ぬこ。ぬ。ぬ。ぬ

同　かしこまりてこぐらうまき烏うあ　藤村
同　我うしのこしたれ養あり　素秋
同　年ごろいかくきんうれほとぎす　賀月
同　秋ぎりのうのうるうまり　野水
同　いまづまこうまつまこうる別ふ　鈴雪
同　すずしさ庵炎ようる鱧うれ　昌長
同　きぐ秋の月のやすきもなぐ　泪雪
同　葉の戸をぐ岡をかむれが　杏雨
同　ちり原ちまくぐぼうまぐ　重浜
同　本葉くあくうぎわうぐ　一茂
同　馬花ようの車門半朔うれ　一井
同　らをくりなぐをぐ松外　夜雨

送備

同　言葉と類とあうるる雑るぶ　一雪
同　リメ別の庵閑入るかぐぐぶ　一井
同　かくぐ寸十もあき夜あぶ　風泉
同　花を年くうぐ月ぐうんうれ　さい
員　あくをもぐゆ月夜ぶ　野水
積　雨ムあうまくまくまくまくぐれのか　尚白
同　波横をるぐわくある十夜外　据道
同　メうれよぐわくくまこ白ぐうぶ　羽紅
同　鶉のくよりもぐ雪ぐうれ　下蜂
同　梭桐の葉乃雪を行ぐあくぐ　雲童
同　雪の秋乃ちまくまくまくまくぐ　当白
同　ぐぐくくれ庵わぐ深きゆぐぐ　宗伏

□ ある僧の嫁ぶり花の新うふ　凡兆
□ 新田て稗殻ながしぐれかな　昌房
□ 野馬ゝ子供あそぶ狐うれ　凡兆
□ 呼うて鮒賣みしあれば　日
□ 乳のこゝろ（青畝追悼）　尚白
□ 先　あかぐらと鶯とせうあるあれば　日
□ 鮎のこゝろ白魚逆ふうれる　芭蕉
□ 炭焼と浪掛ふの舟さびるかな　玄虎
□ 茨ゆゑ拔ゝ上まるあつさかな　芙蓉
□ 腰うけて中ぶしき陸ものぶ　西堂
□ ゝるまれ植かれる早苗ぶ　魚日
□ 藻のむもとうぐゝもるべ行ふ　殘香

□ 稜あげく宗ゝいやうな豆ふ　牽牛
□ 月浪のあゝ沙ゆる蕣うれ　狐屋
□ ゝく花をむしりげる夫ぶ　木節
□ ゝうゝく白日ヒガカリ　柳枝
□ 細工ゝ枝種のつぶゝふ　隨友
□ 竹のゝあゝ岸のくびぶ　可誠
□ いゝゝ川名ゝすゆる乃ゝふ　里圃
□ あゝ鷹の壁ゝ通づくゝもふ　畦止
□ 病僧の庭ゝくゝ柿のゝうふ　曽良
□ 猿蓑ゝゝれるみの杉露ふ　沾圃
□ 不川ゝ富士の新ふ沒干ふ　園指
□ 蓑虫の却ゝひらゝゝふ　牽錢

のぶの帆の淀路をもれぬ波千鳥　去来
一株の牡丹をもてきて口の素ふる　尾頭
菊畠奥ゆかしき雪のくもりかな　杉風
秋のくれいよいよかるくかるくなる　荷兮
一枝をさげなる竹の若葉かな　仙花
抱うわくをもぶいける花ぐさ　斜嶺
芭蕉宗祇池に蓮あるんの船　去来
うねりをもつてくさかし柳かな　湖春
傘をかたげけるる柳うる　芭蕉
をぐるの柳をもあるかをうる　日
山吹も巴もいづるゆうをうる　許六
川中の根本よりもぶすぐる　芭蕉

荊蕎麦の花の雪ふる雀うれ　相実
柳ぐるいつもの日のいづる山路うる　芭蕉
ゆざくるゆ川むすもるぶ　普全
ゆ炉をもうるくちる塚ぶ　探芝
陸つぶる命ぶるもむゆ鮒ぶ　為有
氣相よりもまるの麦ぶ　仙華
町中へもぶぐる簾の柳ぶ　利牛
土をふ籬ぶちうむ桂ぶ　孤屋
五人扶持ぶもうぐぶ柳ぶ　吟艮
炉ぶ乃月まぶるれぬ落ぶ　仙花
氣入まぐぶうるつぶむ桂ぶ　曲翠
青柳の泥ぶもぶぐる汐干ぶ　芭蕉

同　陣まぐし月のるびの子　柳が　幸祝
同　四ツ五器の揚くれ　花見ごろの　芭蕉
同　揚ぐれ節ふちらる　初日が　文考
同　ぐ汁も　新ふ　ふる　菁が　其角
同　らぐいすの　寄ふ　初ゆくすぢが　桃隣
同　寄ふ　おゆふ　裏　する　河　芝　寒雪
同　鶴鶴の　屋ふ　ふつけざる　柳ふる　一風
同　ちわふ　ぐ　同　例ふ　者の　例の　西　例　ふ　みあ
同　ふ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
炭　かふ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐみ　ふ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ

月

うぐが宿そどこやら秋の草かな　宗和

続

三あるくくんくるぶれて。すくるぶ　歩巣

日

梶の名乃五助とゝよ。月ろぶ　如夏

猿

病鳥の秋ろく。ろくるぶ　芭蕉

茨

うゝくくと。すくるく。乳母の留守庵ぶ　文帥

春

山寺くゝ。岩搗くなどの。月夜ぶ　越人

炭

並ぶ。ろくるけく。叩のあつろぶ　林之

日

うの花ゝ。張行　節の馬の。夜明ぶ　許六

猿

水庭をみく。ろくるの。小野ぶ　文章

日

茶の湯とくつろぶ。ろくるぶ　亀義

続

ナ六夜ろくるぶ。園のろぐ。ぶ　芭蕉

春

雪の庵の草のみ。蔭ぶ　野坡

炭

篇ゝ良い。茶の薬茶の。ろくるぶ　游刀

春

腰ろ。元日。里の梅ぶ　摩夕

猿

ぶろくるく。ろくるく。月夜ぶ　其角

続

年切の老木。梅の若葉ぶ　千川

貞

麦喰ろ。ぶ。ぶ。ぶ　野水

瓢

木のくく。汁と鱠。さくくぶ　芭蕉

炭

梶月一下見ばくく。ろくるぶ　玄来

日

梅一本つ。草一のすぐぶ　露沾

春

藤の花ぶ。ぶ。ぶ　越人

炭

ろくくぶ。一二の梅乃夜明ぶ　其角

猿

彼岸ろ。ぶ。ぶ。一夜二秋ぶ　路通

炭

枝長くなるぬ。梅ぶ　湖春

同　あすといふも見のがしのくちおし　荊口

続　李をる庭のむこうのゆふぐれ　万子

歳　花のあと久しくはよもぎの葉かな　子珊

同　猫のみれくんげかぐれの月　芝角

同　中下もそれ何某ノ殿ノ花見ニ相撲のつもりかな　素龍

同　法度場の柏ゆゑ　野坡

これもこぶれもかくのごとくにさるべきる頃あるべく廉

のかの屋敷なるべし　かくのごとくにさるべきる例と

つうつとぶかの事なり　まと廉のかのやうにすべし

よもぎ　こけもれかなるるかあり

荒　すしきとく庭ばより雨る　鱧ふ　昌長

同　ちぶしはうの貴義る祝ふ　芝夕

春　すすき寺かくれぬものとそとふ　春角

猿　ちぶしは栗の笑ひ　祈恋

同　ちぶしくもくれ枝のひとつぶ　杜国

これもの白ちぶしは屋敷のぐるくにくるかなく

皆かりそもむぐまこぐかくるれぐるること

一柳の愛例ちぶしは　ちぶしぬるもしいぐ

のようにめぐるあるかれ俳諧を学ばすくるぐるれ

ぐるれ学ばかりかりとそもつるとそれとふの

つくるくるるるるぐ　出るの例そつるまるくあ

人ぐのちぶしぐ

○まくふ人の廉の例　これざるるの指

ものあかるぶとるる句　それとくぶるや

[illegible]

[illegible]

トニテ定ムルヿナリ　[illegible]文ヾあるべき時結物に[illegible]例と持ち

[illegible]連俳[illegible]

[illegible]

○集[illegible]物柳[illegible]芭蕉[illegible]

[illegible]

[illegible]

荒　おうぎへ刀もさし二面みうきくうれ　蔦蹲
曰　うゝ四しうみちる林の馬ゆふ　胡及
曰　うきぐもも月うきはのひとうぶ　湍水
曰　いざうはもまぐさしまれ野ぶ　芭蕉
曰　一本の苔ゆもあるもあまるまさいぶ　杏雨
曰　よゝぼのしもたで大雪のゆづぶ　野水
続　うちうぐすゝ小豆も市の師走ぶ　正秀
曰　大名の関ゆも庸ふる夜そうふ　許六
荒　あぐしもそぐ島つぐ小まうぶ　野水
かゝの白どたいうちくうずくうれて　詠の何し
行ふのうるれど大うぐうれ上ゆるもの宮ゆ玉
やる毛家のもにくゝ諸のもにうあぐ　れくうぐ上の

廉のぶ　春のぶ　又異例のぶかぐよ上ゆ毛家もの
ゆうよく合言と味ゆうくけ例何ゆもの何ゆゆ別例ゆ
ゆるぐ　何も何ゆの可ゆ例ゆうゆ例ゆう連
ゆ仏僧ゆもゆうゆうゆぐ上ゆ出ゆる廉ぶ上ゆ
領のもれゆあゆる也　春のぶもゆう　廉　おゆめゆもゆうゆ
ゆるぶ　実　曰　如常　紀うゆくゆゆるぶ　曰　名　おゆうぶ
くゆうぐゆるゆ　曰　かゆのぐくぶゆうゆ　これゆぐ詠ゆゆ
ゆ　詠ゆうゆゆぶゆくゆゆぐ
荒　俳　義ゆくゆゆすゆゆゆる小廉ぶ　蕉笠
猿　ゆくくゆ　善光寺開帳　卿ゆゆ満ゆる高仏ぶ　芭蕉
けんゆゆゆ　ゆ例ゆうゆゆゆぐ　ゆゆゆ寄合ゆるゆ
ゆゆゆゆぐ　ゆゆくゆ　相敵ゆるゆゆこゆゆくゆの門とゆて

むとそれどけうめんかなまぐ稔そのてまよ引掛かげつ
よくまん為ようとしてとて行をまつ出そうぐけそぐめの白のこと
て小廉の角為るぐ安心らくくゆくてこなてこハ不自由
てあるべくとちゆんかなる鼠かげつてくぶてやくきてくれう
ぶてるこれと
○まくせて一字ぶて稼するあり我門ニテハ等閑くて
るくい上ようの字とけてあり上ノ何モ何ぶ
て疑のうかてるみくされど
は疑のうかりとつてちゆうぶ
ふむ事かり
てもの字ある例
ものうて疑てるべきうつてぐ

弥カトモ
ノ例ニ同ジ
ものあ
伊物

荒　芭蕉

この句ちりくぐ世ても例ちてぐれどけんをちよ
て これて疑のうめかにくきてうかうかまてこれ
て 續ぐ拾て集て冬隣 秋そぐのてうかまてつ
ゆくてくみれど作者のかて牛のうかるべんてく古文脈
結ぶてくてく掃ぐちり 但しそけ句のて毛家のれなり
今ハ甚毎の句この句ぐ毎の海なり
猿　鳥ぐて毎ぐ稼ぐて時
月　鶏ぐぐてくて時
続　やりぶて毎ぐて時
てるてこの句て人の蓮毎の句て句ぐく諸のうぐてくて
疑のうてるべ すぐて毎句ぐ毎なるぐ諸みて 諸ハ一句なの

路通
吉来
西吉

例みそぶらづまとして[illegible]

一字のかたちをうつくしくあらはすにはかたちにのみ[illegible]

ごとく俳諧よこの例のかなふまじ——

荒　　芭蕉

　　　

姥とゝんとゝく門の扉がとのかつらの音とゝまりなんぬ
ほむるほゝの肉ちりぬのくあしてちりてゝふるんほゝ酒ゝ
まれだけもゝ。その姥とにくゝとゝもゝ又ねゝとゝ文ゝ
きやむぐるめゝ。てゝりゝしゝゝゝるをかく。乙ゝゝゝゝゝ

集　あゝくゝしゝゝゝ　芭蕉
冬　笠ぬぐゝく　野水
猿　まゝゝ大事の　鮫をとゝす　出す　去来

○疑屬

か

元うゝゝゝゝ。ゝゝかゝゝゝゝゝ

かく問ふ人なりやと問ふ人もいてうよくぶれさうなり

荒　奥山とあれはれて撫ずる岩の角　湍水

猿　ちよろく人の小袖千ながうせとなりけり今や　土用干　芭蕉

この二句端水が句も岩の角のつめるとみく奥山とく人はかくぬかるとつけこしもまぐれわぐ霧ひくつめるを撫とあてみるをこれてのてあるは眼おにくこのつくしちものこ土うしあがりよりしてこ波の蓮葉のうを眼おの人の衣ぬし蛍ようをわどくく月干すものなりをまこ人力衣ねくるを南しいるあるのをぐ小袖のうりわぐこうてくもおこをくしくの土用干やすしんわ

まのうやとじひすれるんこうわをおをあるのかくりを　蕉

やといふりこの長別あるなのをぐ

○猿　汁迄ちろぐちう馬乃玲　湍水

馬ともこ庶のくみちう金翠の湍　湍水

麦先ちやいうを高う猫の麦　芭蕉

ひとりを東侍の屑う田侍う　杜国

ちくくと碎ちくくんの屑う何　同

寄ちを南ゆくくんをチンバう　野水

捨ちをくくをわるう磐のをるれる　羽笠

おるぐ〜かくう文字のゆがむ戸　傘下

太鼓ちをぐ〜階をのぐ蛙う　同

傍ちを蛙ちくくを土をくかつ陽う　凡兆

雲の峯今のくは厳ちゆう　之道

庶時ちくくをくむ月う初をて　芝角

汗四陣ちくうくを仰ぬまう　乙州

続集　山吹もちるら祭の鞠なるよ　泗堂
花のさかりよりも上野の陸奥草　芭蕉
炭　かつるくに来うの蓋さきはく　志太
続　大の淵を歩くこそ人の色のあ　山秀
日　首の長く（亀ヶ寺ニテいとづるのちるの時の　木節
日　かろくと山吹ちるら風の音　芭蕉
葉　手の否まるくまあるまにに者　文鱗
日　さと人のまちりいう檜の雲　宝因
日　姿ちて大きちらちるの春　芭蕉
日　らくくと二の月の吹ちる　荷兮
日　紡紡を春風なまゆくけう　野水
続　狼をなりうるなる弾きき　洁圃

○数刺を十月朱の言い出長のうけ　陽和
徐　亦引の書の唱手うう合歓の花　千那
るくのごく引かすすごく捕てる抱あるがしゆ決しらをを弾やんと
するるちりやもきるとと抱くなるい也　狩下のやの家と吹さやくくみる
べ。（但コレラノ内「素ヤ」ヨ「すそれく」「山ふさし」「ちくと」ナドノ句ハ昔のかノ心ニナンテモカナヘリカ、ハ下ハ字ニモアルし）
○又引の下ヨ。らん引んなどくちゆる例あり。弾ちも花ちさん
引ちくんなどのごとし。引すたびたちの例ほく即ち上の引よ
句ごと。引ちくと歌ちるといるく。山吹ちるらんといつもしかく
いるものし。狼とおちりうるちとと歌ほう送りう人ほうんとん
かるごと。かくのごく。らん引かとと狼ちちあくするくうのかれ
くるの中ちに。やちくおるやんとする時の用ほくかとくるごんく文と
たるるるち。三るくに佛陀くに例の字おくなくごあ上らん引んど

おくべき所なれども、これをおきて例のごとくなり。これを中のうとうとし（但器スルト器セヌトニ例ナリ。御結抄ヨミ合セ）

猿　きのふとくれる初雁の米俵　曾良

日　いづくにか雁の落ちぶれ鳴くなる　千那

日　ひくくんの声だにうけぬ蛙せくの柳　文草

集　さそれんかこもるこもるいまを花のまを　芭蕉

俳　いづくへか陰くゆけばなほ物ぬを　里圃

員　なほ書しらるあいをいちにけるを　亀障

猿　天井しらるいかうなづくを　李東

荒　月を主とするどの大名の一ト夜ばかりを　傘下

これらのごとく例をもとを知る可しとなり

○又寺でがらりとかくのみなるべしとなり

○又寺でがらりとかくのみなるべしとなり

繼ぎもいかるべし。俳諧をもその変化すくなし

猿　内義張りとふとくとそれ　乙州

炭　巻く富士ふるるとふ後行町　東花

日　盃の月ねるとふ門前たる紀行　野坡

員　折ーちるとふ例の蓮さ　野水

荒　一夜とふ山吹のごとくゆづれ　猿雪

日　つれとふ山吹のめるみるとふ　舟泉

続　名月の花とふみるとく　樽畠　芭蕉

これらのかとそれ カト見テ カトキテ カトミテ などのかとは

月のもとをみるとふ名やごとく「みるとあれば」とあるとの字の

ふ。下見下聞下為下思下云の口用。のごとくの例下にく

[illegible]

○又このかこれを引てもいはれぬべくこゝろつゞくるなど。かゝるかゝる例かずあれ。畢竟もれぬ俳諧とすまゝ。其天性といふべき後に新結物をもくひろくつゞけ。かゝるかなどいふれもつて其等ひろく詩かるはいふべくつゞけ。ざりけんこれをもて俳諧わく事をもて長所かあるなるべし。其外線れなどかの魂のもの。さるとこゝあるべく大かゝ獲得あるべ。ざりく。これ[illegible]。かゝるこゝ例ひく。かゝのこゝろく。かの一定ひくかゝのこゝろとなるあるものの例ど一百ゝゆ

猿　　寸雄の一句をなにう年のくれ　　寸雄

これ薄うどのどもを作る重の隅と何ほどの事ぞとうもとかゝるかゝいひ。あ。これ節かゝのうけ例なかりけるものゝ理と我を表法

ゝゝひ出て。なくんへのゝひくく味するゝゝつぶ。かゝるかゝ[illegible]。やゝとゝ例。るのゝ例ゝ同じ。但やトかトノ別ハアルコトリ　かやとゝる例も

猿　　一里ゝゝれ花守の子孫こうや　　芭蕉

世句ノ詞書云　いぶの国花恒の在ゝるのかゝなゝゝの八重桜の料ゝつくゝれくゝゝれ仲くゝゝ[illegible]トアリ

ゝれゝかゝやゝゝ例ゝあゝゝ天和落ゝりゝれゝ。重ゝ[illegible]かゝゝゝゝ

ゝゝとゝゝゝゝ

や

上こうつぐしくいうこそこそ　芭蕉

[illegible]やとけくんくべ　やとつつ音のおく義と上の詠のやのかこそ

[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]上下の[illegible]　[illegible]

炭　こがらわく茶摘もきこや　時雨　芭蕉

この句意もし茶摘と三月のあつ[illegible]

つむにくいすぐ茶の芽出と摘むなわぐ　そのつぼ人あつ[illegible]

てつむ[illegible]茶の[illegible]大[illegible]

[illegible]茶の末[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

続日　[illegible]の雨[illegible]や　土　華の[illegible]　杉風

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　甚角

荒日　すぐくとつ山や　揚[illegible]や　土　華　芭蕉

埋火[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　

の手ならし世義別とくく自ずと語ぬ（ふまゆる）（ゆるも）
たゞひなるは

荒　蓑虫のいかゝみるや　帰雁　見花

世句ナドハ・ゆるみるぶトイフベキヲ・やトイ（リ・はカラヌ例ナリ・モシやトイハデ叶ハヌコナラバ・ゆるやいかゝトイフベシ・スベテ（れかなゝナドイフ詞ノ下ニハやハウカハヌ例ナリ・かハヌ例ナリ・コレラハ手コヨミモフナリ・ユレラハ手コヨミモ
ワキニヘヌ人ま　シ

炭　鶯の栖やそのゝ　旅雁

コレハかトイフベキヲやニアヤニレルナリ

夏　ゆくゝきゝしやイ　月　荷葉

楝　雨のあゝやゝ　軒ゝ　雀　羽紅

春　柳ゝ　佐ぶゝ　ゝ　鶯ゝや　千五

続　春ぶられのゝあげしや　土　花　閑仙

荒　ゆゝゝゝゝなゝ　ゝ　ゝ　

荒　　　

春　山や　花　かきれしの酒ぐや　蕉門

炭　麦畑の　田植や　かくれ　竜ぐ　けり　許白

同　さの葉に　ふらつけや　星むら　蕉角

猿　れを月の　孫ぐや　水仙花　不玉

同　なぐんの　小神　ちよがらせけるさ　いまや　土用干　芭蕉

同　今や　ふる　月の　刀　さし　出す　生来

蕉　月や　さら　耳　ぐや　ふる　年一の　蕉　西武

続　鳴虫の　蕉　ぐや　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　加雪

同　門　砂　や　ふ　ぐ　帰　さの　洗髪　里友

荒　おふ　ぐや　追儀　ぐや　ぐ　ぐ　ぐ　鬼の　面　荷子

続　八専の　雨や　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　菊の　蕊　治園

蕉　書　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　荷子

猿　ぐ　ぐ　竹　田の　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　時　ぐ　乙州

荒　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　望水

同　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　長虹

続　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　蕉

荒　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　望来

続　ぐ　の　蔓や　西瓜上ケの　花の　稚　治園

集　ぐ　蔓や　実方中将ノ塚ヲ詠テ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　芭蕉

此句ナドイト正シキツカヒ方ナリ。コレヲ以テモ上ニイヘル蕉翁

続　一田　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　山技

集　小鶏　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　芭蕉

伏や

この伏やの一例なり。ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　

「ふるやの」ぬるまやかなどもいと仙洞の御句にて「ふるやの」ぞやとつゆぞとも思やる句なれば。ギヤニヨウテ何とかいふべしみそかの句と異なるも。ギヤニヨウといふべし。「秋の日」書日ともいふ。おなじやの。ギヤニヨウテ。ちりもひろる例なり。古今集に「ふるさとの」寺合とも云べき例なり。

春

一夜うす宮石の馬こう　寺かるもの　野水

前句「紙一世日ともやれば」の影。羽笠。却ヨリ廿日ハヤク麦粉ヨツカフハ。馬カフホトノ寺ナレバニヤトノ心ニテ。ギヤタルナリ。後句ハ「うす」魂ヨツカフ。ゆゆしきの月。且葉コレナリ。二月ニ竜繁ルトイフ。即ち春ノ句ヲウケタルナリ

夏

酔ぶりのもつれもしけなれや　傘下

前句「内へ」の犬。傘下。犬ノ内ヘハイリテ形吠ルハ。酔ザメノ水ノ飲タキ。此ノ顔ノアヤシゲナレバニヤトノ心ニテツケタルナリ。後句「ふる雨の」。雨の降出ノ。越人コレハ雨ノ降出ノ心ニツカフルニテ。ちりやノ句ヲウケタルナリ

俳

ひぐらしの小田に土持ひきわれや　洛頃

前句「かさ」ハ笠ノアメラ年。ガミユルハ。小田ニ土モウヒナレバニヤトノ心。後句「ひぐらし」ハ田ニ土持フヨイハフ心ニテカトノ心ニテウケタルナリ。素男コレハ祝ノ

月集序

山道のわたりくおろすべき特ひきもや　基角

コレハコノ集ノ出来タルハ。コノ道ノ面目ヲオドロスベキ時運ノイタリタレバニヤトノコトロナリ

続

弓固しるけるわれや　支浪

コレハ藤袴ノサキツルハ。弓固トルハナレバニヤトニ心ナリ

この俳句に四例あり。第一に「続」俳句。第二に「月集序」。第三に「俳」。第四に「続」俳句。第四に「俳」。第四に「月集序」。第四に「続」俳句。第四に「俳」。第四に「月集序」。第四に「続」俳句。第四に「俳」。第四に「月集序

集　まるるやあるまき山のあき風　芭蕉

日　こがめのあまるのはの菊　日

この二句ともに詠も俳の例かり

やそ　これも俳諧のまことに味ありて人のんに清さと興せきする頃上のかるの所にいづかめく「やそは日ど数の行きれども」さの義なり。かくソウデハナイと抜きて「やそは」ソウデハアルマイと義する。やそ自然とやとかの義別にかるるなり。七部のうち刻みて歩きれば上のいづくに歩いるまきて「やそ」で古例のごとくつすく「やそ」あり。俳諧抜きてこのごとく書るべきの陶句はその魂をたすけるべし

炭　かくて事のいろいろ出来あらばつて　芭蕉

やそ　これも「やそ」数ほどく。そして清ることそれてみんにくだ「やそ」とうどべばとそ今了どべその事どの命をおすもんして。「やそ」とつるやこれを俳諧まことみんもことうり。

ざく。一條院所字の時ちほくことをてうか俳諧

○願屬

世ニハ願ト詣トヲ混ジテ願トノミイヘド願ハ我ヲガフナリ詣ハ人ニアツラフルナリ此父ハジメテコレヲワカテリ

でや

こしき 俗ニカウシタイ 八ハシタイ そなへ 行タイ 聞タイ 見タイ

などゝ タイにあてる 何カリ 古ヘ こしき うれとなげ

こしき こしきもとかり 手ぶ ぶやとつて こやこぐいうとかも

なしんとらてんやゆうぐやとつて ゆうぐいうとかりろうんなどゝ

ゆうりしまぐし 偽ニ 一見やぐや 表いなどゝ ぶすこ 古ヘい

さぐり 見ニ 今ぶしんの時ニ 何のやし だやまのとるんく

かぐうの思事のまぐかしんゆ 成しん時とらのねうしんとゝ

かく そのさぐ所あるなとぐかし

炭

黄昏ニ ぶやの 伊勢のゝ川俊 芭蕉

黄昏ニ ぶくあ 伊勢のゝ川俊

伊勢の和俊と称ぶ いうこ りうしんの ふぶの 時 称ぶ ぶ

ふぶの 世ハ など 凡例ニ 俗やぐ ぐ 俳諧の 魂ニ ぶ

あり いちぐ ぶ いうこ ぶ ぐ 世ハ 黄昏ニ ぶ

伊勢かる人とも 様をのぐ れる ハ 黄昏ニ 霊の 形とし ぶ れ

だ これ たぐ 黄昏の ハ こ の ぶ 黄昏の 様とこぐ とれ

ぐ し 所 ぶ た ぐ この 所の こ ぶ ず て 言霊の 形 ぶ て

る事 ぶ げ ぶ し 所 ぶ ぶ 今 れ ぶ ん ん

ぶ ぐ

荒

荷ぶ ぐ ぶ ぶ ぶ 荒ニ ぶ ぶ

土器の ぶ ぶ ぶ ぶ 菊の 花 甚角

山畑 ぶ ぶ ぶ ぶ ぶ 茅 引 松芳

日

猿 菊行勝ノ古キ食ヲアメヘラル 出 ぶ ぶ 初 ぶ 見 ぶ 叶 食 竹戸

続

浴

夜

日

集

花のまき　賀童

ちぶりけく　酒雷

三月の風のき　利牛

ちぐ　芭蕉

去いづれも何シタラバイカニ何ナラシのんとうわぐ明りるや。「ぐや明

とつまたるる孫屬ようる孫のるや。これを何シタラバイカニ何ナラと

ようるいうまとんつ杉をせうんわくかをこと添つまと

集　年の市　線香　うしと　出ぐやか　芭蕉

荒　芝茶うく　まてつのもちぐや　蛾人

ちぐふ

ちがもも　ちがもとも　ちぐふずもぐふ

ほうが　ぬもが又　ちぐふや　ちぐもか　ちぐもやかぐふれ

も例をかくも俳諧もつうぐ。元をぐふ詞をうぐ酒

の飲ふるかくもけるぐ。水をりとかりとも時をうるふ

とももうぐ。ちわぐ古文の書をとてもけをかうーをくうくうくの

書をねぐふ詞ふまぐ。ちりくうるふ書をねぐ弟しかく側をれ

ぐのんかるくもの字のあるぐ。くくくくちちちひくぐ。

後世セメテとう詞上古ちかふ詞かるぐふのかうとも。もの字をうん。

セメテのんくるる所字の字集ふぐーうとも。　天智帝の大和ーと

ぬもぐ字もつぐくみまうとも。あをぐくるる月。所ちをくる妹ぐうふの

夢をくちぐすす。ちりくかるくもの字のんかをくぐ。ぐふと

字を詞をうるる。ぐくう濁音ぐ。字のあとひくうるるる

なりふくうぐ山をうとつぐ山を橋をこれをるの字を濁わぐ。

山のさとことてんりうなるがぞしまだかとうたのかうねぞそ
しさなるぬとやくがかとこ河るもかとこ河かとこがめるだの
んあわだこのんてわだんとと今そくみるんとこるべ

集　みやこ　二部へゆうん　あとがぶ　芭蕉

てぶ

てぶてぶとつうかり又何と何てぶが何何てぶともた
うふしたの宮あてとなぐくくく上のさぐあてつぐくく布傷の事
あるかうまてかてあてく行ものくうりのとねぐあるしたて
ぶてててててんててててかなどてのなめる天布波てとの雪
のトる別イ河あるぐふとてぐふらあくくくでてとうてテオイ
タとりてんしてんそテユカウとてあし　てノトノ河ハコレ　ニカギレルヿニハアラズ　かやくノ河ハ
そぐふとうあくくくとてぐふ

ね

これと顧のねとうりく寄てこてるぐたれ河いるくくたれ

そそてぐふとうつ寄そ耳梨山の山掘ふとえくく浄くくくすちと
このあくとうりくくとてんく日集「梓ちくれ山でくらひわくくく
とくくあくくじあててぐくく寄そんのあいくる本とつまぐらくく
ぐくくくくるのあいふくくくるかあくくくるたのくくくとを
くくくるてのんなう

ち何ぐ

これとての宮なくぐくりの日くくわぐ方のまくとあくえくくと
くくくくあくくくくと成就のくくくくれぐくくくくくくくくくと和
にくくくくぐくくくくくくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

荒　うぐひすの菅廣奉納ものこそ祈の梅　亀洞

うぐひすの雪の水に洗ぎて祈の梅　亀洞

て沐浴して陽の春を待つ雪の白川　亀洞

猿　うぐつぎの角かくしけり侘庵内石　芭蕉

荒　雪の雨才ども鳴ぐこそ　嵐蹊

内　若小松ちらけくみよ雪の梅　亀洞

猿　ちびくの行ふ木蓋ヘ別ル似よ椎の花　芭蕉

荒　里侍の園をみとやおく雪　内

内　ちらしよ富士あしぐらの月もみよ　去来

内　狩野桶狩野桶トイフ物ヲ其角ノ餞ニオクルトテ　嵐蹊

内　雲をいく園の花こそ鮑とり　内

内　雪ちれよすぐるを行よみえあを　嵐蹊

内　水あびよ岩ちる寸上をゆるぎなる　釣雪

徒　梶責も出よ吉野ニテ　空牙

荒　帖ちらくこそわよ恋　芭蕉

内　きめくと霞みよくすぐらくり　冬杜

内　初しぼの十月更衣　荷兮

徒　顔よ洲ぬ豊なし出よ川ざら　芭蕉

内　酒部屋よ琴の音やよ窓の花　惟然

炭　ありつきの月とちりさやよ菫の色　乙州

猿　うぶ我をさびしうやさんこ行　芭蕉

内　おちくろ菊ヲ茅舎ニヤドシテ　土芳

春　風のかぐ秋の日　鶴よ　網いれよ　荷兮

前句「碁打とおるるきぬぐの月　野水　コレハ碁ノイニノミアルヨリオドロカレテ」トイヘルモノナリ

続　嵩柴のなかに　みよ包尾の鯛のうろ　耕雨

冬　うぐいす起よ　紙炬燵とぐて　芭蕉

前句「梯ゆるゆるやかのうなる」荷ヲコレハ寄ノ元旦トモシラズアル心ヲ・オドロカシタル心ナリ

夏　かけごうけよ　看經の中　野水

前句「天仙夢ヨ冷食あさしまの雪」荷ヲコレハ人ヲ悼ル心モナキヲ・オドロカセルナリ

月　うらむれば、うらの食瓦の潮干みよ　越人

前句「名すの、物のこゝろを風」日人コレハスギヒニ一途ナルモノ、心ヲ・オドロカシタルナリ

猿　野を横ゝ馬引むけよほゝ毛　芭蕉

月　こゝ出ようぐやがてのの蛭の巻　月

炭　翁ニ等屋ニ子キニ　斜嶽

冬　りゝ、ぞ、ゝ、みゆよ茅の乃宿　杜國

我月いでよ　月よ　月よ　月よ

前句「ひと迫く狩楽屋と世を捨く重ヲ」コレハワガ身ノナリ出ル道後タルニナシ置テ・ヨト、イ心ナリ

やこれらの例、上の例のようなる千ぢう涙

この尾、手ゝ、なけや等「こやとも人となどゝめることなり」

よりの呼ゝ家なり、これども、やて五十音の所縁とあり、所縁ある

ものゝ義相なり、これども、よくむりあるものゝ、ものゝ、ものゝ

むりあるものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ

ナルコトヲオモフベシ

荒　のゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　加生

これのゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

ね

これを俗のねとゝなし。上の類属に出せるねとせずして別ゝ。

ん

これを番ゝ所のんといふゝ。訛ともゝ。ゝ。ゝ。

[illegible]

[illegible]

て屬[illegible]事なり

○近昔より[illegible]はかり[illegible]りんこがすく上

[illegible]ぶ[illegible]

拾　瓜はまくる男ぐあれかとゆみすぐる　芭蕉

○誰[illegible]に「ゆけ」のもれ「ゆく」[illegible]紫の[illegible]

なの衣鮮[illegible]

いとあるべ

続　[illegible]　涼葉

日　山人のひるねがたれ[illegible]　桃妖

日　魚あるる幸[illegible]　馬英

猿　一月[illegible]　丈草

日　[illegible]川のぐせ[illegible]　配力

日　弱法師　ワガ門ゆく男　鮮の礼　其角

[illegible]

○禁屬

イサムトハガウハスルナ・ソウハスルナト・制止スル心ナリ・スベテ訛モ禁モ今ノ俗言ヨリミレバ押柄ナルヤウナリサレドソレハ今ノ耳ニテキクガ故ナリ・古ハサルコトナク・上下ニカヽハラズイヒシナリ

か

上の詞のもんのもよりつゞけ・これなどもいとさもさやまぢこゝにもたゞ殺と貪とをかゝぐ河・ひくひとうんとせんとするんをう・よろしきつゞけなく・かゝる制止するんとかるも・上下の事ばかりにてもおのゝ字のあるくせゞひとつにはたらくはたらくこゝろ作するるこゝろ・こゝに木偶乃和尚のごとし・女の名聞と言はぐ出世をかり娼妓のこゝろをしをつくれで娼妓とかるふり・まことの言のおもむき・裸木偶のごとしと知るべし

猿　まことやこゝろすれ離のかたちの元　荻子

離のかたちまことのこゝろをすてゞと俗ぶと行りつゞく心を物ちかのこゝろ

しをまつゞけひとつにやとこゝろ・くつてしを！此制止よりけゝぬけとけゝぬ

こゝろのまゝにかるこゝろをもとかゝるこゝろ

続　猿の舞　おもうる猿をうたくふ　陶狗

〃　あるこゝろのまゝにかるこゝろ　芭蕉

荒　朝ぼらけとうのるこゝろをふくこゝろ　持子

炭　汐の魚物とるれ村ぐ吹　部月

集　こゝろふよ門人送別義の中一かる物の元　芭蕉

〃　つれ似ふこゝろのこゝろ　吉葉風

〃　こゝろのこゝろ　月

猿　形ちこゝろ猿ぬ　千那

〃　こゝろのこゝろ打ぬこゝろ　嵐雪

こゝろのこゝろ・つゞけ制止やんとこゝろ心とこゝろのこゝろとひとつ

やんとこゝろんとみるべ・こゝろの自とこゝろ上の詞のけゝる・こゝろ

ひとしかるべし。俗語にいはく。上のうけざるにこそ。その俗語のまことにたがはず。

続　ちとせのあと　松風の枝まさしくふる　馬見

荒　松の木ずえにかかる秋の蝶　毋象

これらの句。古人のごとくなるべし。「ちとせのあと」あるべしとも。

ちとせのあとにこれらの俗語をいれて。俗語のよるべきにあらず。

よりあるべきにあらず。「ふるこれ」「ふるこれ」「ふるこれ」

「ふるこれ」ものべ事にあらざるべし。俗語かりてつぶ無あるべきなり。

もあらはるべし。さるゆえにまことの句。ひとしんよりあるべし。

句にはよりて異あるべきなり。俗語にはいとて。俗語にはすべからず。

事一なりと。世の俗語にんぞくるべし。すべて蓋句相一なる

の中をもるべかるべけれ。年を相てつぶてそれなり。されば今

つるの。さらにつぶ年よみひとへにあるべしもの。

句何を

句何をとりあつめ。あとをとりいとまなく。一度その句に切なる禁用

なり。されば俳をいとまなくそうもあるべし。とて。いとまなくそれなるべ

といふけんあるべし。又明日かどをくるるうるあるべ。今日をするべ

時に。句何をなり。これなどのうひめあかくつつれば。ひとえてつ

ひとくべし。漢文に句莫の字のわれて同じ。わるとは時結構のこと

なり。これらいとまことにもとめとふくのもられ也。おりるこ。おく

いとまずしてそうとだりはるく秋る句あり。これ元来あるべし。

かなり。辛のかかくるもあるべ。されどんあるべ。かるべ。

そうとだりはるまで也。異千る例もある事なれば。されい。

よるべ。これらのおく。さて例は混ぜられあるべ。天正波の理也。

らあ今。異例とあるべんとて。おそるべ。れ杉也。上長柳の句。芭蕉

[illegible]

（アカバハ飽バト赤葉トヨセケタリ。ヒロ。ヒロハ葉ニヨセテイヘルナリ。）

[illegible]

白選　さらぬ・ゆ・え　泥かれしろ　ひ・く　蓮　芭蕉

集　[illegible]　蛇なくらい　枝　友まぢ　同

有磯海　教[illegible]（尼貞書ガ身ニカリケルトキニテ）　[illegible]　意　祭　同

以上前[illegible]

猿　嵐どもきの夜（浪人ノ宿ニテ）　[illegible]　義　半残

集　玉川のそこ　[illegible]　芭蕉

春　[illegible]　踊　[illegible]　冬之

[illegible]

俳諧天爾波抄巻之二　終